

植民地アメリカのジャーナリズム : William Bradford

著者	荒木 暢也
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	68
号	1
ページ	67-97
発行年	2021-07
URL	http://doi.org/10.15002/00024436

植民地アメリカのジャーナリズム

William Bradford

荒 木 暢 也

1

ウィリアム・ペンは、イングランド内戦（English Civil War）さなかの1644年、ロンドンの名家に生まれた。王政復古に多大な貢献のあった海軍提督であり、後に下院議員をも務め上げたサー・ウィリアム・ペンを父に持つ彼は、豊かな家庭環境の下、イングランド上流社会の一員となるべく育っていった。しかし、誰もが羨むその環境も、激しい内戦中に生を享け、王政復古で成人期を迎える目まぐるしい世の変化から、多感な彼を守る聖域とはならなかった。幼い頃から芽吹いていた神秘への憧れは、成長とともに強力な磁場を持って彼の将来を差配するに至ったのである。

内面にあるものを凝視し、超越的、異界的なものに憧れた彼は、やがて英国紳士となるべく入学した、オックスフォード大学クライスト・チャーチ・カレッジ（Christ Church College, Oxford University）を、宗教教育不適応で放校されるに至った。¹ その彼にとって、1667年、所有地アイルランド・コーク・カウンティ（County Cork）、マクルーム城（Macroom Castle）滞在中に起きた、巡歴中のクエーカー教徒トーマス・ロー（Thomas Loe）と出会いは、神の導きとも思える出来事であった。時を待たずしてペンは、イングランド王室の後見的役割を持つ名家の相続者から、逆に国王への宣誓を拒否する異端の徒、クエーカーへと改宗していくのである。²

ジョージ・フォックス（George Fox）を開祖とする、クエーカー（Quakers）：キリスト友会（the Society of Friends）の信仰は、神から届く「内なる光（“inner light”）」の啓示のみに忠実であることを求め、王家を含めてその他一切の権威への随順を拒んだ。³ 1640年代に誕生して以来、信徒を増やしていったこのクエーカーは、王政復古後のイングランドで、宗教迫害の対象ともなっていた。そのクエーカーの世界へ自ら飛び込んだペンは、その信仰を包み隠すこともなく、むしろ積極的な言葉を持って己の信念を世に問うた。

体制側の代表者とも言えた名家の子息が、新時代の旗手として、そして異端の徒として自らの存在を世に問うた事実は、イングランドに社会変革の時到来を告げていた。1668年から69年にかけて、ペンは世に問うた著作の数々は、^{そしり} 邪教徒の謗をものともせず、一貫した信念で貫かれていた。

Truth Exalted の発表後、*The Sandy Foundation Shaken* を著したペンは、遂に異端の罪によりロンドン塔へ幽閉されるに至った。⁴ しかしそれでもなお、彼は獄中で *No Cross, No Crown* を執筆、さらに翌69年の釈放後は、自らの政治理念の表明とも言える *The Great Case of Liberty of Conscience*

Once More Debated & Defended (1670) を著し、信仰と思想への寛容を強く世に訴えたのであった。⁵

イングランド司法史に残る有名な事件はこの直後に起きた。1670年8月14日、市内グレースチャーチ (Gracechurch Street) の集会場で、同朋ウィリアム・ミード (William Mead) とともに集まった人々の前で教えを説いたペンは、民衆扇動の罪で逮捕された。⁶ この時、法廷で繰り広げられた問答の一部始終を執筆、刊行し、事件の内幕を広く世間に問うたのは、他ならぬペンその人であった。ペンは、己の事件を、大衆の耳目を集めるスキャンダルから、信仰の自由とそれを抑圧する権力の非道を糾弾する、歴史的記念碑へと変えていったのである。⁷

事件が起きた年、父サー・ウィリアム・ペンは、息子との和解を果たさぬままこの世を去った。有名な異端者となった息子の行く末を案じた父は、死の床で国王の弟、ヨーク公 (Duke of York ; 後のジェームス二世 (James II)) に対して、息子への特別な庇護を懇願し、ヨーク公もこれに応じた。⁸

父の生前の約束通り、ペンはイングランドとアイルランドの領地を相続し、チャールズ二世 (Charles II)、ジェームス二世と親交を持った。この王族との個人的な繋がりが、やがて彼を大きく利することになっていく。ペンはクエーカー宣教師として、そして神学論争家として活動に邁進し、1671年と77年、オランダとドイツへ旅立ち、各地で伝道の使命を果たしていった。⁹

2

17世紀の新世界アメリカは、本国イングランドで異端とみなされた者の逃避の場であった。しかしクエーカーの場合は、そのアメリカにおいてですら、行く先々で住民との軋轢を生んだ。独特の衣装に身を包み、帽子を被る彼らの出で立ち、否が応でも周囲の目を惹いた。とりわけ最古の植民地、ニューイングランドへの移住は、彼らにとって命を賭す危険な行為であった。ピューリタンの土壌は、クエーカーに対して、容赦ない強烈な牙を剥いた。禁止令に反して、ピューリタンからクエーカーへと改宗し、死刑に処せられたメアリー・ダイヤーの例は、本連載でも既に触れた。¹⁰

彼らが安心して移住できたのは、ペンを含めたクエーカー有力者が購入した土地、ウェスト・ジャージー (West Jersey ; West New Jersey) のみであった。¹¹ 仲間のさらなる移住先を求めたペンは、国王へ土地の拝領を請うた。王が亡き父に負う16万ポンドに及ぶ借財を考えれば、この願いは認められるであろうと踏んだのである。¹²

国王の立場から見ても、ペンの要望はむしろ好都合であった。借財問題と共に、国教会の悩みの種、クエーカーを、植民地へ移住させることになるからである。1681年3月4日、国王は、現在のペンシルベニア州とデラウェア州を包含する広大な土地をペンに下賜した。ジョン・ウィンスロップの「丘の上の町」から数えて、実に半世紀後の出来事―クエーカーの新天地、ペンシルベニア植民地 (Province of Pennsylvania; Pennsylvania Colony) の誕生であった。亡きサー・ウィリアム・ペンの功績を讃えた“Penn”に、ラテン語で森の土地を意味する“sylvania”を付した、ペン

シルベニア（“Penn-sylvania”）の命名は、チャールズ二世自らが行った。¹³

ペンは、自らの土地を法の下に統治し、信仰への寛容と自由を保障する土地とすべく、渡航前の1682年4月25日に自由憲章“Penn’s Charter of Libertie”を、¹⁴そして続く5月5日には、統治骨格を定めた憲法草案“The Frame of Government of Pennsylvania”を発表した。¹⁵

後に“The Frame of 1682”と称せられたこの草案には、人を御するものは政府ではない、良き政府は良き人によって成り立つとする、ペンの人間理解と理想の政治についての基本概念が、序文として付されていた。（Appendix：William Penn, Preface, “Frame of Government of Pennsylvania, May 5, 1682”）

“The law (says he) was added because of transgression:” In another place, “Knowing that the law was not made for the righteous man; but for the disobedient and ungodly, for sinners, for unholy and prophane, for murderers, for whoremongers, for them that defile themselves with mankind, and for man-stealers, for lyers, for perjured persons,” &c.,”

「法は、人が罪を犯すがゆえに存在する。行いの正しき者に法は不要であり、法とは神に背き、神を信ぜず、罪深い、ありとあらゆる罪人のために作られるものである。」

“Any government is free to the people under it (whatever be the frame) where the laws rule, and the people are a party to those laws, and more than this is tyranny, oligarchy, or confusion.”

「この世のいずれの政府も（その統治骨格が如何なるものであろうとも）も、法の下に人民があることを忘れてしまえば、それすなわち、専制政治、寡頭（少数独裁）政治、あるいは混乱に陥ってしまう。」

“Governments, like clocks, go from the motion men give them; and as governments are made and moved by men, so by them they are ruined too. Wherefore governments rather depend upon men, than men upon governments. Let men be good, and the government cannot be bad; if it be ill, they will cure it.”

「政府とは、人がネジを巻かなければ動きを止めてしまう時計のようなものであり、政府をより良き方向へ導くのも、全くの廃墟のように没落させてしまうのも、全ては人の行いである。政府とは、人に依存するものであり、逆に人が政府に依存するのではない。しからば、その人を善にせしめよ。さすれば、政府が悪とはなりえない。もし政府が悪となれば、必ずや人がそれを救い、改めることであろう。」

あたかも、次に続く草案本文“The Frame of 1682”を自ら牽制し、必ずや湧き出てくるであろう、数々の権力争いを予見したかのようなこの序章は、果たして、草案立案時にペンが抱えた苦悩そのものであった。ペンの周囲にいたクエーカー大口地権者らは、草案発表前の段階で、植民地における自分たちの権益と発言権の確保を求めている。“The Frame of 1682”は、こうした彼らによる圧力に対して、ペンが行った譲歩と妥協の産物であったと考えられている。ゲリー・B・ナッシュ（Gary B. Nash）は、ペンの従兄弟であり、初代総督代理を務めたウィリアム・マーカム（William Markham）の言を引いて、この事前折衝を次のように傍証している。

This uncomplicated view assumes a confidence in the Quaker founder on the part of his principal supporters that probably never existed. Penn, in all likelihood, was far from a free agent in the work of constituting a government. William Markham, his cousin and a trusted adjutant in the colony for many years, indicated as much when he later wrote: “I know very well it [the Frame of Government] was forced from him by friends who unless they received all that they demanded would not have settled the country.” (Nash, 1966, p. 183)

事実, “The Frame of 1682” は, クエーカー大口地権者の圧倒的な優位を定めていた。統治の要である議会は, 彼らを基盤とする植民地評議会（上院: The Provincial Council; The Upper House）と, 小規模地主, 郊外の非クエーカーからなる代議会（下院: The General Assembly; The Lower House）の二院制を定めていたが,¹⁶ 代議会の役割は, 評議会から下りてくる議案の是非を投じるだけの存在と規定され, 実質上の統治権限は, 領主, 総督とこれを補佐する評議会の専権とされていた。¹⁷ 両院の間に横たわった, この権限の格差が主因となり, 憲法草案 “The Frame of 1682” は, 代議会の反対多数で否決された。

これを修正した “The Frame of 1683” もまた, 権力の中枢を占めるクエーカー有力者と, 郊外の代表との軋轢に直面した。この草案は, 国王の代務者としての総督を定め, 総督が求める法案に対して, 議会が異議を唱えることを禁じていた。総督を補佐するべく任命された評議員は, 実質上の法案審議に加わったが, 代議員の場合にこれはなく, 前回同様, 激しい非難の応酬となった。

結局, 評議員と代議員による事前の話し合いを審議プロセスに加えることを条件として, “The Frame of 1683” は, ようやく実現の運びとなった。¹⁸ それでもなお, 議会の権限は評議会の優越を規定していた。評議会は, 総督または総督代理不在の折には, 植民地の統括権を持ち, 数々の司法権限（実質上の最高裁権限, 裁判所設立, 判事の人事決定）に加え, 植民地代議会の解散権をも持つ, 強大なものとなっていた。¹⁹

しかし, その後の名誉革命後の変化に加え, ペン自らの要請も手伝って, “The Frame of 1696”, “The Frame of 1701” へと改正を加えられていったペンシルベニア憲法は, 次第に当初のペンの理想へと近づいていった。²⁰

ダニエル・ブーアスティンは, この, 後にアメリカ合衆国憲法の原型となるまでに発展したペンシルベニア植民地憲法こそが, 18世紀前半のペンシルベニア繁栄に繋がったとして, 法律家アンドリュー・ハミルトン (Andrew Hamilton) の言葉を引きながら, 次のように語っている。

While William Penn was a man of courage and of principle, he was by no means an unworldly or inflexible man and he was anything but doctrinaire in government. The prosperity of the colony in 1739, according to Andrew Hamilton, an eminent Pennsylvania lawyer of the day, was less due to material circumstances than to “the constitution of Mr. Penn.” (Boorstin, 1958, p.42)

活発な移民誘致も相まって、続々と集まった移住者は、イングランドのみならず、ペンが1670年代に伝道したオランダやドイツからの移民も多く含まれ、草創期ペンシルベニアは既に一定の多様性を担保しつつあった。移り住んだクエーカーの多くは、「兄弟愛（“brotherly love”）」を意味する土地、フィラデルフィア（Philadelphia）に居を定めた。クエーカー以外の、例えばドイツ移民は、フィラデルフィア北部郊外へ移住し、農業と手工業の分野において、優れた技能を発揮していった。²¹ こうしてペンシルベニアの人口（黒人奴隷を含む推定）は、1700年に18,000人に達し、独立前の1770年には24万人を越えて、アメリカ最大級の人口を抱える有望な植民地へと成長していった。²²

政教一致の原則の下、ピューリタン教会と植民地政府が強力に主導したニューイングランドとは異なり、草創期ペンシルベニアの実際は、発足当初の憲法草案を巡る一連の確執と、政治と宗教の主導権争いが禍し、政府と議会はほぼ無為、無策の状況に等しかった。頼りにならない政府に代わって、開拓の先鞭をつけていったのは、移住者自らであった。例えば、“The Frame of 1682”で既に謳っていた学校の設立と芸術、学術の振興は、クエーカーや他の移住者が率先して実現していった。²³ 彼らの自主独立の力は、ペンシルベニア誕生から僅か二年後の1683年に最初の私塾を誕生させ、さらには1689年、広く一般の子弟を教育するPublic Grammar School（後の William Penn Charter School）を開校させるまでに至った。²⁴ William Penn Charter Schoolは、その進歩的な理念の下、1701年に奨学金を、1754年には女子入学を、そして独立前の1770年には全ての民族の子弟に対して門戸を開く、アメリカ屈指の教育機関へと育っていった。²⁵

3

1685年、ペンシルベニアへの移住者を運ぶ船中に、ロンドンで出版・印刷修業を終えたばかりのウィリアム・ブラッドフォード（William Bradford）と妻エリザベスの姿があった。

1663年5月30日、イングランド中央部、レスターシャー、バーウェル（Barwell, Leicestershire）に生まれたブラッドフォードは、僅か4歳で印刷職人の父と死別し、亡父と親交のあった著名なクエーカー印刷人、アンドリュー・ソウル（Andrew Sowle）の下へ身を寄せた。²⁶

教祖、ジョージ・フォックスやウィリアム・ペンとも親交を持っていたソウルは、²⁷ クエーカーの出版物を多く請け負い、1681年のペンシルベニア下賜の折には、証人として立ち会うほどの実力者であった。²⁸

ソウルの下で印刷人修業を終えたブラッドフォードは、1685年4月28日、師の長女エリザベス（Elizabeth Sowle）と結婚、同年8月半ば、当面必要な印刷機材を携えて、ペンシルベニアへ旅立つ人となった。船中のブラッドフォードの手に、教祖フォックスからの推薦状が握られていたことが物語るように、この移住の背景には、岳父ソウルによるクエーカー有力者への積極的な働きかけがあった。ソウルは、この娘婿を植民地初の印刷・出版業者に据え、後の独占的な地位を築かせることを期待していたのである。

彼が持参したフォックスの推薦状には、ペンシルベニアにおける更なる布教のために、若き印刷人を推薦する旨、記されていた。²⁹ フォックスは、ブラッドフォードをペンシルベニアへ送るにあたり、クエーカーが必要とする宗教書籍の印刷にあたらせることを念頭に置いていたのであった。

到着後、ブラッドフォードは、フィラデルフィア郊外のオックスフォード街区（Oxford Township）に居を構え、初仕事に着手した。³⁰ 誰もがクエーカー宗教書を印刷すると見込む中、彼が選んだものは、サミュエル・アトキンス（Samuel Atkins）の年鑑、*Kalendarium Pennsilvaniense, or, America's messenger: Being an almanack for the year of grace, 1686*（1685年刊）の出版であった。³¹

年ごとの暦や潮の満ち引き、地図、公的行事などを記した年鑑（almanac）は、この時代、数少ない人気の商業書籍であった。読者は、新しい情報を求めて毎年これを更新する必要がある、年鑑は出版元にとって確実に利益の出る商品と言えた。後に中部植民地（middle colonies）随一の印刷・出版企業の創業者として名を馳せる、ブラッドフォードの事業家精神の発露とも受け取れる事件であるが、こうしていきなり商業書籍を出版した彼の行為には、植民地評議会からの出頭命令と蔽罰が待ち構えていた。

ただしフォックスの推薦状は、ブラッドフォードが行う印刷の中身を限定したものではなく、評議会はここで彼の年鑑出版を表だって咎めるわけにはいかなかった。そこで彼らが問題としたことは、年鑑の中に使われていた文言、“Lord Penn”であった。ウィリアム・ペン自らが不快感を表したと伝えられる³²この表現を、クエーカーの教義に抵触するものと判断した評議会は、ブラッドフォードに対して、発行済みの全年鑑からこの文言を削除するよう命じた。そしてさらには、以降、評議会の許可なくして、印刷を行うことを禁じる命令を下したのであった。³³

アンドリュー・ソウルを義父に持ち、ジョージ・フォックスの推薦状を携えて、前途洋々移り住んだブラッドフォードの門出は、こうして植民地評議会からの蔽罰と仕事内容の制限で始まった。印刷、出版を^{なりわい}生業とするものにとって、仕事の内容を権力の監視下におかれてしまうことは、収入の額すらも制限されてしまうことを意味していた。しかし、この頃のアメリカで、印刷人が自らの仕事内容の決定権を持たなかったのは、ブラッドフォードに限ってのことではなかった。本連載でも再三述べてきたとおり、印刷内容の管理を含む出版統制は、植民地統治の前提であった。³⁴

4

草創期に見られた政治の混乱に加えて、17世紀末から18世紀にかけてのペンシルベニアは、クエーカーの土地特有の問題を抱えていた。創設間もないこの植民地では、今後の信仰路線を巡ってクエーカーが二派に分かれ、両派の激しい鏖迫り合いが行われていた。この主流派と反主流派の争いの飛び火が、ブラッドフォードに降りかかる次なる受難となったのである。

クエーカーの正統を維持することを主張した主流派は、統治の要である植民地評議会をも支配し、その政治力を駆使して、信仰の浄化にも似た動きを見せていた。やがて18世紀に入り、彼らのこ

の動きが、ペンシルベニアでの自らの立場を窮地へ追い込んでいく要因となっていくが、この時点で彼らはそれを知るよしもなかった。

クエーカーが現実政治を司ることの難しさを、ブーアスティンは、次のように述べている。

Almost from the beginning the Quakers realized that their religious doctrines, if construed strictly, would put difficulties in the way of their running a government. It was one thing to live by Quaker principles, quite another to rule by them. Even in the earliest years, they were able to govern only by compromising one principle after another. Not only were they often driven to use fictions and evasions in defending the colony against external enemies, but in the domestic government of the colony also they had to come to terms with the non-Quaker ethic. (Boorstin, 1958, p.43)

他の宗派が共通とする倫理・道徳律を否定し、拒否していたクエーカーは、キリスト教内においても、特殊な存在と考えられていた。この典型例が、議会や法廷でなされる宣誓・誓約 (oath) であった。クエーカーは、教祖ジョージ・フォックスに始まって、この宣誓を拒否する人々であった。³⁵ 植民地議会、とりわけ代議会には、郊外に住む非クエーカーの代表が多く、彼らの宣誓拒否は、議会権威を貶め、議事決定を無意味とするに等しい暴挙として、強い非難を浴びた。³⁶

本国イングランドでは、この対処法として、1689年、クエーカーに限り、「確約 (affirmation)」を宣誓の代わりとすることを認めていたが、ペンシルベニアにこの措置はなかった。³⁷ 彼らは、その必要性そのものを認めようとしなかったのである。クエーカーの土地で、自分たちがその信仰に従うことに何の罪があろう—ペンシルベニアのクエーカーは、非クエーカーの非難に対し、一切耳を貸そうとはしなかった。

ちなみに、イングランドで確約を宣誓の代わりとする代償は、誠に厳しいものであった。クエーカーは公職から追放され、刑事裁判の証人に立つことも、陪審員を務めることも禁じられていた。³⁸ ペンシルベニア・クエーカーが、自らをイングランドから隔絶した特殊な存在ではないと実感するのは、1693年のことであった。名誉革命以降、王政復古後の政治を一変させていたイングランドで、ウィリアム・ペンは、この年、植民地の領主権を剥奪されたのである。³⁹

ペンが訴えた信仰の自由こそが、多様な移住者を各地から集め、18世紀ペンシルベニアは繁栄した。しかし、その異教への寛容が、やがて逆に自らを少数派へ追い込むという、誠に皮肉な結果に繋がった。発展と共に増加していったルター派、長老教会、メソジスト教会、そしてカソリック教徒ら、非クエーカー移住者は、宣誓を拒否するクエーカーの人格そのものを疑い始めた。例えば、クエーカーの信条として、人前で帽子を取らない習慣は、非クエーカーの目には傲慢とすら映った。⁴⁰

当のクエーカーは、自分たちへのそうした批判が高まるにつれ、非クエーカーとの妥協の道を模索するどころか、逆にこれを頑なに拒み、態度を硬化させて行った。結果、彼らはペンシルベニアで次第に力を失い、自らの土地で少数派の地位へと没落していく。ブーアスティンは、この経緯を

次のように記している。

Even their belief in religious toleration, which had been embodied in Penn's first Frame of Government and continued as a principle, helped put the Quakers in a minority and, eventually, in an isolated position. While most Quakers remained in their original eastern settlements, a motley flood of Lutherans, Presbyterians, Methodists, and even Catholics, poured in around them. Within less than a half-century after founding Pennsylvania, Quakers could only describe themselves (in Penn's prophetic phrase) as "Dissenters in our own country." (Boorstin, 1958, pp. 67-68)

難解な教義に縛られていたはずのニューイングランド・ピューリタンが、時代の変遷と共に、それまでの独断的な姿勢を和らげ、他派との折り合いを重視していったのに対し、ペンシルベニア・クエーカーは、逆に分厚い壁を周囲に巡らし、その壁の中に自己を安住させようとする、固陋で狭隘な集団へと化していった。以下、ブーアスティンを再度引用する。

While the dogmas of Quakerism grew more fixed and uncompromising, those of Puritanism tended more and more toward compromise. Puritanism—proverbially rigid and dogmatic—expanded and adapted; while Quakerism—traditionally formless, spontaneous, and universal—built a wall around itself. This is the story of one of the greatest lost opportunities in all American history. (Boorstin, 1958, p. 41)

ブラッドフォードが移住したその頃は、このクエーカー主流派による反主流派弾圧が、まさに進行中の時であった。

1687年、クエーカー会議は、折からの定期会議（The Quarterly Meeting of Philadelphia）の議事録を印刷するにあたって、ブラッドフォードに対し、クエーカーとしての信条を明らかにするよう求めた。⁴¹

この会議側の要求には、それ相応の理由があった。初仕事に年鑑出版を選んだブラッドフォードは、この直前、またもや新たな年鑑を出版していた。しかも今回の年鑑は、反主流派の代表的人物と目されていたダニエル・リーズ（Daniel Leeds）による *American Almanack for 1688* だったのである。

クエーカー会議は、リーズの文言の中に、クエーカーが不快と感じる表現が多々見られるとして、ブラッドフォードに全年鑑の回収を命じた。⁴² そしてさらには、今後クエーカーに関する文献を印刷する場合、必ず事前に会議側の了解を取るよう言い渡したのであった。⁴³

5

初仕事に選んだ年鑑出版が、商業書籍であるとして植民地評議会の怒りと不信を買い、さらには新たな別の年鑑出版においても、クエーカー会議の強い反発を受けたブラッドフォードは、信仰の

真偽を疑われた末に、仕事の中身を政治と宗教双方から厳しく監視、制限されるに至った。

そして、三度目の事件は起きた。1689年、評議会と対立する代議会議員、ジョセフ・グロウドン（Joseph Growdon）の依頼を受けて、ペンシルベニア植民地憲章（The Charter of Pennsylvania）の印刷を行ったブラッドフォードは、司法権を持つ評議会によって逮捕されたのである。⁴⁴

当時、植民地政府が印刷人を必要とした背景は、法律・法令をはじめとする公文書印刷にあった。しかし、ペンシルベニアでは全く事情が異なっていた。ペンシルベニアは、憲章を含む法律の印刷を禁じていた。彼らが印刷人のブラッドフォードを受け入れた理由は、あくまでもクエーカー会議関連文書と宗教書の印刷にあり、法文書印刷は想定の外であった。

このペンシルベニア特有の印刷規制の背後にあった権力側の統治心理を、アレクサンダー・ウォール（Alexander J. Wall, Jr.）は、次の言葉で端的に述べている。

This early conflict revolving around the freedom of the press was undoubtedly instigated by the fact that to many, the lack of a published version of their laws kept them in ignorance of their rights and privileges. (Wall, 1963, pp. 363-364)

ペンシルベニア政府と評議会が行ったことは、憲章をはじめとする法律文の印刷を禁止し、ペンが掲げた民の権利を捨て置くことであった。聖書の民、ピルグリムが集った植民地アメリカの識字率は、決して低いものではなかった。⁴⁵ 一定の識字能力を持つ民衆を無知のままに保とうとすれば、文書印刷と出版を規制することがもっとも効果的と言えた。自由な出版を否定し、民を無知な群衆のままに保って、意のままの統治を目論むこの思考は、洋の東西を問わず、古来行われてきた圧政の常道であり、ウィリアム・ペンの理想下に建設されたはずの草創期ペンシルベニアもその例外ではなかった。

我々ひとりひとりが「個」としての意識を持ち、常に自己と他者を峻別するのが現代とすれば、この時代は、その「個」が出現する時代であった。名誉革命以降、とりわけ出版物の検閲廃止（1695年）に至るまでの間に、イングランドで続いた社会変革の状況は、まさに、この「家」、「地域」、そして「教会」への従属から解き放たれた「個」の主張が、印刷物を通して拡散していく有様であった。

しかし、植民地アメリカの統治者が、本国イングランドと同等の体制をとることは、およそ不可能に近かった。ロンドンと半ば原野に近い植民地とでは、全ての状況が異なっていた。つまり、17世紀、18世紀の植民地統治において、ロンドンに見られた新しい時代の、意識に目覚めた「個」が誕生することは、それ自体が危険極まりないことだったのである。

統治者のこの心理を、リチャード・クルーガー（Richard Kluger）は、1671年のバージニア植民地総督ウィリアム・バークレー（William Berkeley）と、ニューイングランド自治領総督エドモンド・アンドロスの言を引いて、次のように記している。

The government's prevailing attitude may be judged from a 1671 remark by William Berkeley, longtime governor of Virginia, the most populous of the thirteen colonies: **"I thank God there are no schools and printing [here], and I hope we shall not have these [for a] hundred years, for learning has brought disobedience and heresy and sects to the world, and printing has divulged them. . . . God keep us from both."** Fifteen years later, King James II's written instructions to Edmund Andros, on becoming governor of the newly designated Dominion of New England, were of like sentiment: **"For [in] as much as great inconvenience may arise by the liberty of printing within our said territory under your government, you are to provide by all necessary orders that no person keep any printing press...nor that any book, pamphlet or other matters whatever be printed without your especial leave and license first obtained."** Even after Parliament voided its licensing act following the Glorious Revolution, such repressive instructions remained standard in the American colonies. In New York prior to 1719, every governor was told that no press, book, pamphlet, or other printed matter was permitted without a license obtained from him or his office. (Kluger, 2016, p. 30, 太字は荒木)

ちなみに、植民地における出版規制の影響は、書籍をはじめとする出版物の価格にも現れていた。書物はこの頃のアメリカで、一般に高価な贅沢品と見なされていたが、その背景にあったものもまた、出版を民衆の手から遠ざけようとする権力側の意図であった。印字製造に必要な鋳造場は、イングランド政府の管理下に置かれ、その数も制限されていた。紙やインクは貴重品であり、文明の利器である印刷機を操る印刷人の数も、当局によって規制されていた。印刷に不可欠な製品の管理統制、印刷人の数と彼らの仕事の制約は、当然の如く書籍価格の高騰に繋がった。結果、聖書の他に民衆が手にできた書物と言えば、公文書、年鑑や実用書の類のみであり、芸術や文学、思想の啓蒙などは、その内容のみならず、価格面においても、庶民からは遠くかけ離れた存在であった。⁴⁶

今回のブラッドフォードは、評議会と対立する代議会議員の依頼を受けて、ペンシルベニア憲章の印刷を行った。評議会とすれば、そのブラッドフォードを、法文書印刷禁止で真正面から断罪することは、対立する代議会との関係をさらに悪化させることを意味していた。この回避のため、彼らは、印刷されたペンシルベニア憲章に、印刷人の刻印（imprint）が欠けていたことを問題視した。評議会は、今回の印刷は、ブラッドフォードがその違法性を知りながら、故意に刻印を省いて行ったと結論づけ、刻印なしでの文書印刷を禁じた法令，“Act of Parliament of 1662”違反の罪により、彼を逮捕したのであった。⁴⁷

1689年4月、植民地を統括するジョン・ブラックウェル（John Blackwell）の尋問を受けたブラッドフォードは、自身の発言を含めて、この時の模様を書き残していた。⁴⁸ 以下、アレクサンダー・ウォールによる、ブラッドフォード陳述を二次引用する。

According to his account, he declined to confess to publishing it, claiming that he was not bound to testify against himself and that he had heard of no law which prevented him from printing what might come to hand. In a spirited statement, he declared that printing “is my employ, my trade and calling, and that by which I get my living, to print; and if I may not print such things as come to my

hand which are innocent, I cannot live... If I print one thing to-day, and the contrary party bring me another tomorrow, to contradict it, I cannot say that I shall not print it. Printing is a manufacture of the nation, and therefore ought rather be encouraged than suppressed.” (Wall, 1963, p. 364)

彼はまず、印刷人の生活権を訴え（“is my employ, my trade and calling, and that by which I get my living, to print; and if I may not print such things as come to my hand which are innocent, I cannot live...”）、自らに印刷を依頼する人の多様さと、それをこなさねばならない職務を主張し（If I print one thing to-day, and the contrary party bring me another tomorrow, to contradict it, I cannot say that I shall not print it”）、その上で、公器としての印刷、出版の重要性（“Printing is a manufacture of the nation, and therefore ought rather be encouraged than suppressed.”）を訴えている。

人は多様であり、その考えを印刷することに罪はない。印刷は自身の生業であり、自分はこれによって利益を得、日々の暮らしを営んでいる。民のこの正当な権利を、権力が規制の名の下に一方的に抑圧して良いものなのか。証言の中で、ブラッドフォードがもっとも強調したことは、印刷人の生活権と商業権という、極めて現実的で素朴な訴えであった。最後に締めくくりとして言及した、国家、国民のための、公器としての出版（“a manufacture of the nation”）は、自らの主張を正当化し、体裁を整える意味で用いた補足の観が漂っていた。

植民地期アメリカにおいて、出版の自由が声高になっていく過程をつぶさに見ていくとき、我々が気づくことは、ブラッドフォードが強調した、新しい時代の「個」の主張を印刷する印刷人の生活権、そして利潤を求める商業権の問題である。出版物の検閲廃止に至るまでの間に、イングランドで続いた社会変革は、植民地の印刷人に少なからぬ影響を与えていた。アメリカへ移住した人々の意識の根底にあったものは、自分たちは本国の民と同等の権利を有すると言う、マグナカルタの伝統に則ったものであり、⁴⁹ ロンドンの同業者が享受する自由は、植民地においても当然、与えられて然るべきと考えていたのである。イングランドで実現した検閲廃止は、植民地の印刷人である彼らが、生活を守る上で譲ることのできない基本線であった。

ウィリアム・ブラッドフォード然り、ジェームス・フランクリン、ベンジャミン・フランクリン然り、そして後のピーター・ゼンジャー然り、17世紀末から18世紀初頭にかけて、出版と言論の自由を声高に主張した代表的ジャーナリストが、自ら技術を持つ印刷人であったことは、この意味でごく自然な成り行きであった。

今回のブラッドフォードの主張は、後にベンジャミン・フランクリンが、“An Apology for Printers”と題して発表した、自由な言論と出版の意義の原型と言えた。そのフランクリンが、やがて独立宣言と合衆国憲法双方の署名者となったことは、アメリカのジャーナリズムの自由を語る上で決して見逃すことはできない。自由なジャーナリズムを民主主義の根底に置くアメリカで、その起源を植民地時代に辿ることは、私がいちばん興味を抱くところであり、今後も折に触れて書き記していきたい。

草創期ペンシルベニアで、評議会と代議会による政治対立とともに、クエーカー主流派と反主流派の対立による深刻な宗教対立が起きていたことは既に述べた。政治と宗教が複雑に絡んだこの権力争いは、18世紀前半に見られたペンシルベニアの繁栄に呼応するかのように激化していった。この点をブーアスティンは次のように述べている。

The first half-century of Pennsylvania history was strikingly prosperous. “From a wilderness,” Richard Townsend observed in 1727, “the Lord, by his good hand of providence, hath made it a fruitful field.” Still, during these years there was a great deal of party strife, which had very early led William Penn himself to plead with the colonists that “for the love of God, me, and the poor country” they “be not so Governmentish.” But the two principal parties—the democratic and extremist “country party” led by David Lloyd and the conservative party of city merchants led by James Logan—were Quaker. (Boorstin, 1958, p. 43)

対立の象徴は、ウィリアム・ペンが「あまりに政治的すぎる（“Governmentish”）」と嘆いた、デイビッド・ロイド（David Lloyd）とジェームス・ローガン（James Logan）の姿であった。共にペンの側近であったこの二人は、今後植民地が進むべき道を巡って、真っ向から対立していた。ペンシルベニア初代司法長官を務めたロイドは、進歩的なスタンスを取るグループ（the popular party; progressive party; the country party）を率い、ペンの秘書を務め、保守路線を目指したローガンは、保守グループ（the proprietary party; the conservative party）の先頭に立っていた。

トーマス・F・ゴードンは、両者の対照的な性格を踏まえて、この対立を以下のように記している。

The inhabitants were now distinctly divided into two parties, the proprietary and the popular. The governor was ostensibly the head of the first, but it was guided by the talent of Logan. David Lloyd was the leader and vital spirit of the second. Both had learning and ability, but their characters were opposite. Logan was haughty, reserved, and aristocratic; his interest and temperament alike led him to the side of the proprietary. Lloyd was accessible to all, affable in his manners, pertinacious in his enterprises, and devoted to the people. His legal acumen and habitual disputation gave him many advantages over his active but less practised antagonist. On the one side the major part of the council, the judges, and other officers dependant upon the crown were arrayed, whilst the other was supported by many of the oldest and most respectable inhabitants, and by a united and unyielding assembly. (Gordon, 1829, pp. 133-134)

どこか近づきたい雰囲気を持ち、貴族的なローガンと、気さくで親しみやすい性格のロイドとでは、人柄もさることながら、基盤とする支持住民も正反対であった。ローガンは大地主、富裕層を基盤とする評議会の支持を得、ロイドは植民地開拓に力を注いできた地元名士と代議会の支持を

取り付けていた。

支持集団を異にし、全てが真逆だった両派の多くが、同じ信仰を持つクエーカーであったことは、この場合、事態をさらに複雑なものとしていった。彼らの対立は、単に現実的、俗物的な政治対立に止まらず、信仰そのもの、ひいてはクエーカーとしてあるべき姿（quakerism）を巡る対立をも意味していたのである。これまで概観してきた、ブラッドフォードに対する評議会とクエーカー会議による数々の弾圧は、ペンシルベニア権力内部で起きていた、この政教入り交じる複雑な対立を背景としていたのであった。

ペンシルベニア憲章の印刷で、評議会の裁きを受けた翌月（1689年5月）、ブラッドフォードの元に、岳父ソウルから引退の意向が届けられた。ロンドンのクエーカーがこれを惜しんでいることを知ったブラッドフォードは、複雑な政治土壌を抱えて思うような仕事の出来ないペンシルベニアに見切りをつけ、ソウルの仕事を引き継ぐべく、ロンドンへの帰京を決意する。妻エリザベス、そしてフィラデルフィアで生まれた長男アンドリュー（Andrew Bradford）、次男ウィリアム・ジュニア（William Bradford Jr.）を一足先に帰京させた彼は、植民地の生活の清算に入った。⁵⁰

しかし、ここで植民地評議会とクエーカー会議は、一転、ブラッドフォードの引き留めにかかった。イングランド・クエーカー内でのソウルの位置づけを考慮し、さらには唯一の印刷人を手放すことを躊躇した彼らは、ブラッドフォードに対して、クエーカー文書印刷の見返りとして、年間40ポンドの支給を提示した。これを受諾したブラッドフォードは、再び家族を呼び戻し、ペンシルベニアでの生活を続行させていった。⁵¹

この契約を機に、ブラッドフォードは、植民地での事業に本腰を入れ始めた。1690年には、慢性的な紙不足を補うために、ロバート・ターナー（Robert Turner）、トーマス・トレスイズ（Thomas Tresse）、ウィリアム・リトンハウス（William Rittenhouse）と共同で、製紙場、リトンハウス・ペーパーミル（Rittenhouse papermill）の経営に加わり、事業家としての足がかりを築いた。ドイツ系オランダ移民のリトンハウスが、フィラデルフィアのドイツ人移民区で始めたこの製紙場は、活発になっていった植民地の紙需要をまかなう可能性を秘めた有望な投資先であった。⁵²

こうしてようやく行く手に光明が見えてきたブラッドフォードに、今度は決定的とも言える事件が降りかかった。

先のダニエル・リーズの年鑑 *American Almanack for 1688* 出版の折、ブラッドフォードに対して信仰の真偽を問うたクエーカー会議主流派は、その後も決して彼への疑いを拭い去ったわけではなかった。ロンドンへの帰京を引き留めた彼らではあったが、それはソウルとロンドン・クエーカーへの配慮と、印刷人がいなくなることへの危惧であり、信仰よりも仕事を優先するブラッドフォードに、彼らが信を置くことはなかった。

フィラデルフィア・フレンズ・スクール（The Friends school in Philadelphia）の校長、ジョージ・キース（George Keith）は、当時、クエーカー主流派に批判的な人物の代表格であった。このキースによる主流派批判の小冊子やパンフレットを印刷したのもまた、唯一の印刷人、ウィリアム・ブラッドフォードであった。彼が行ったこの事業としての印刷も、クエーカー主流派の目には、

自分たちを脅かす脅威として映っていた。⁵³

1692年、この二人が共に裁かれる事件が起きた。キースの記したブロードサイド（一枚広告）、*An Appeal from the twenty-eight Judges to the Spirit of Truth* を印刷したブラッドフォードは、植民地評議会により、民情を不安に陥れる扇情的出版物を印刷し、かつ印刷人の刻印を省いた罪に問われ、逮捕されたのであった。⁵⁴

裁きの場でブラッドフォードは、陪審員に対して、この裁判で問われていることは、単にブロードサイドの印刷を誰が行ったかと言うことだけではなく、問題とされた内容が果たして真に扇情的であるか否かである、として、印刷物の内容に関する判断を求めた。⁵⁵ 彼の要請は結果的に判事により却下されたが、これこそまさに、植民地アメリカの法廷で問われた、言論の自由を巡る、基本的な問題提起であった。

植民地時代のアメリカで、言論と出版の自由を論点として争われた裁判は、1735年の *New York Weekly Journal* 発行人、ジョン・ピーター・ゼンジャー（ゼンガー：John Peter Zenger）の例がもっとも有名である。このゼンジャーは、後にニューヨークで成功を収めた、ウィリアム・ブラッドフォードの下で修業した人物であった。⁵⁶

裁判の結果、著者キースは有罪、印刷人ブラッドフォードは、審理中に起きた思わぬアクシデントによって陪審員の意見がまとまらず、最終的に放免された。⁵⁷ アレクサンダー・ウォールは、このあらましを、訴追検事が陪審員に証拠として手渡したブロードサイドの版組が外れ、組まれていた印字が崩れ落ちた結果、内容が判読不能となってしまう、審理が続けられなかったことが理由であったと記している。⁵⁸

この裁判は、ブラッドフォードに最終判断を促した。ペンシルベニアに別れを告げた彼は、1692年4月29日、クエーカー会議と交わした契約を解消し、ニューヨークから届いていた、公印刷人（public printer）の就任依頼を受け入れた。⁵⁹ 植民地総督、ベンジャミン・フレッチャー（Benjamin Fletcher）が、ボストンとフィラデルフィアで既に実現していた印刷技術に目をつけ、ブラッドフォードに声をかけたのがこの始まりであった。⁶⁰

ニューヨークからの打診は、ブラッドフォードにとっても大きなチャンスであった。高度な技術と機材を備えて印刷を行える人材が少なかった当時のアメリカで、公印刷人の肩書きを得ることは、ある種の特権を得るに等しかった。半公務員の身分の下、公文書印刷に携わること、当局が認める正規の印刷業者として、私的な印刷事業も行えるその立場は、彼が望んでいた事業家への道を切り開く可能性を秘めていた。この時ニューヨークがブラッドフォードに提示した条件は、ペンシルベニアでのクエーカー契約と同額の年間40ポンドの支給と、植民地内で彼が行う私的事業がもたらす収入の保障であった。翌年4月10日の就任に備えて、1692年、ブラッドフォードは、家族を伴いニューヨークへ移住した。⁶¹

7

1650年代後半、植民地からの利益に一層の興味を抱いたイングランドは、同じくアメリカでの繁栄を享受していたオランダの存在を嫉視した。1660年に、第二次航海条例（Second Navigation Act）の制定を見た彼らは、チャールズ二世に対し、弟のヨーク公ジェームスへアメリカの土地を下賜するようお願い出た。1664年3月、この要請に応えたチャールズ二世は、ヨーク公ジェームスに対して、当時オランダ領だったニュー・ネザーランド植民地（Province of New Netherland）を含む広大な土地を与えた。⁶²

同年5月、ヨーク公は、リチャード・ニコルス（Richard Nicolls）大佐率いる、四隻の艦隊を現地へ派遣した。8月、ロングアイランド島西端のグレーブズエンド湾から上陸した同艦隊は、オランダ人居住区ニュー・アムステルダム（New Amsterdam）の城郭、フォート・アムステルダム（Fort Amsterdam）の対岸に陣を張り、オランダ側へ降伏を勧告した。背後に強力な武力を見せつけながら、降伏に応じた場合は既得の商業権を認めると言う硬軟入り交じった交渉の結果、ニュー・アムステルダムは、目立った抵抗もないまま、イングランド占領下に入った。⁶³

ハドソン川とイースト・リバーの合流点、現在のマンハッタン島南端に位置し、流域で獲れる毛皮の取引所として発展したニュー・アムステルダムは、オランダ西インド会社の管轄の下に繁栄を続け、派生する多種多様な経済活動が行われる富の可能性豊かな土地であった。オランダの伝統に基づいて、1640年代後半から高度な自治商業都市として発展していたニュー・アムステルダムについて、サイモン・ミドルトン（Simon Middleton）は、次のように述べている。

Beginning in the late 1640s, a merchant pressure group in New Amsterdam conducted a successful campaign in the name of ancient Dutch freedoms for a municipal government that could manage local trade in the residential or “burgher” interest. The justification for this campaign drew upon the Dutch tradition of autonomous urban government and protectionism that aimed to provide for community needs through civic, charitable, and commercial institutions—for example, local courts of justice, orphanages, and weigh-houses—and the distribution of municipal privileges and liberties including occupational protections and monopolies to nurture local trade. In large Dutch cities such as Amsterdam, Leiden, and Utrecht, occupational privileges and liberties were overseen by guilds, themselves regulated by the city government, which monitored standards of workmanship and training, pricing and membership and assisted members during sickness or old age. (Middleton, 2006, p. 4)

港湾に適した入り江が多く、広大な後背地を抱いたニューアムステルダムは、オランダ領時代から既に、裁判所や計量所、孤児院までの公共施設を備えた自治都市であった。職業特権や市民権は、ギルドが自主的に管理・監督し、製品基準からその価格、市民の疾病、そして老後の生活までも自治政府が統轄していたニュー・アムステルダムには、オランダのみならず、様々な地域から異種異質の人々が移り住んでいた。

生産手段を土地に依存し、集落を形成して暮らす農業地域とは異なり、手工業と商業が生み出す利益を基盤としたニュー・アムステルダムは、商業利益以外のもの、例えば、国籍、民族、宗教に関する執着が比較的希薄であった。今回のイングランドの降伏勧告を平和裏に受け入れた背景には、こうしたニュー・アムステルダムの成り立ちや特質が大きく起因していた。

イングランド領となった、ニュー・アムステルダムとその後背地ニュー・ネザーランドは、ヨーク公の名を取って、ニューヨークと改められた。ニューヨークの特質—重商と多様性について、クルーガーは、他のアメリカ12植民地との比較と共に、次のように記している。

The British province of New York was different from its twelve sister colonies in one decisive way. All the others were founded by Englishmen, and because it was not, New York—and especially the island seaport that served as the gateway to an immense hinterland—drew a far yeastier mixture of settlers than the rest. The other dozen colonies would each attract a preponderance of like-minded sectarians—royalist Anglicans favored Virginia; Puritans flocked to Massachusetts, Presbyterians to New Jersey, Quakers to Pennsylvania, Catholics to Maryland—but New York quickly evolved into a heterodoxy of nationalities, races, religions, and cultural affinities that foreshadowed the so-called American melting pot of diverse human ingredients unique among all nations to this day. Such an amalgam brought its share of stresses and misunderstandings, yet New York’s diversity, traceable to its founding by the Dutch, would generate an intensity of commercial, social, and civic interaction more dynamic and more tolerant of otherness than elsewhere in the colonies. (Kluger, 2016, p. 9)

アメリカ13植民地の中で、ニューヨークはその出発点から他と一線を画していた。ニューヨークの住民は、他の植民地のように、一言でその特徴を言い表せる、同質性を持ち合わせていなかった。その多様性は、植民地の中でもひととき異彩を放っていた。

8

ニューヨーク最初の公印刷人となったブラッドフォードは、1693年、中世オランダの情景が残るパール・ストリート（81 Pearl Street または48 Stone Street）に、植民地初の印刷工房を設けた。⁶⁴ 現在、ニューヨーク市歴史建物保存地区に指定されているマンハッタン、ストーン・ストリートのこの地域は、当時、銀細工や鉄鍛冶職人などの工房や商店が軒を連ねる、ニューヨーク最大の商工業地区であった。⁶⁵

トラブル続きだったペンシルベニア時代から一転し、ニューヨークでのブラッドフォードは、順調に仕事を進めていった。商業書籍への偏見も、クエーカー文書の文言の精査もないニューヨークにおいて、彼のもとへは植民地政府からの旺盛な印刷需要が集まった。

しかし問題は、その仕事量に見合った収入が、政府から得られなかったことであった。当局の支払いは常に滞っていた。既に印刷に使った紙やインクをはじめとした資材、消耗品への支払いも未

払いが多く、彼の暮らし向きは、公務をこなす度に逆に困窮していく有様であった。⁶⁶ 破産の瀬戸際まで追い込まれたブラッドフォードは、総督と評議会に対し、再三、支払いを求めた。しかし結局、植民地政府が彼に負う全額を清算したのは、移住から20年以上経った1714年のことであった。⁶⁷

ペンシルベニア時代にはそれほど目立たなかった、ブラッドフォードの理財への執念が色濃く姿を見せ始めたのも、ニューヨーク移住後のことであった。ニューヨークでの彼は、植民地政府からの給与の滞りにも関わらず、その時々で持ち得た資金を他人に融通する、金貸しの顔を持ち合わせていた。ウォールは、当時の裁判記録をもとに、夫と死別した老未亡人に借財の返済を厳しく取り立てた、ブラッドフォードの姿を次のように描写している。

Although his numerous petitions for payment suggest that Bradford during these years was having considerable financial difficulty, the petition of Joan Dewsbury to Governor Bellomont in 1698 for relief against Bradford indicates that he was a creditor as well as a debtor. In November of that year, following the death of John Dewsbury of Oyster Bay, Long Island, his widow in her petition claimed that Bradford, who had lent her husband. several considerable sums of money and who, upon her husband's death, had obtained letters of administration from Governor Fletcher, had presented an account against the estate and had taken control of much more than the value of the debt despite the fact that he had promised only to assist her. He had, she declared, acted in a most arbitrary manner, carrying away her household goods, bedding, cattle, winter provisions, and threatened to take what little remained of her goods and the corn out of the barn. She further declared that she was without means of support for herself and family, being near seventy years old and in poor health. (Wall, 1963, pp. 369-370)

1700年に起きた、時の総督ペロモント伯（Richard Coote ; the Earl of Bellomont）との衝突もまた、計算高い彼の性格をあらわす一例であった。地元原住民酋長との会談に参加したペロモント滞在記の印刷を、公務として行うよう命じられた彼は、それが公印刷人として与えられた給与分を超えるものとして、総督の要求を拒否した。当局が負う彼への支払いが大幅に滞っていたことも手伝って、この時のブラッドフォードは強硬であった。これに対して、ペロモント伯もまた一切の譲歩をせず、命令に従わない場合は、公印刷人の地位を取り上げる旨通告した。植民地総督の権威失墜にも発展しかねなかったこの衝突は、ブラッドフォードの一時解雇で事なきを得たが、結局、彼は滞在記の印刷拒否を貫いたのであった。⁶⁸

事業第一のブラッドフォードの性格は、信仰においてもまた然りであった。ペンシルベニア時代には不可欠であったクエーカーであることが、ニューヨークでは意味をなさなくなった彼は、クエーカーを放棄して英国国教会徒となった。1703年にトリニティー教会（Trinity Church）の教区委員を務めたブラッドフォードは、⁶⁹ ペンシルベニア時代の友人、ジョージ・キースやその支援者らとの交流も続けていた。ブラッドフォード同様、クエーカーから国教会徒へと改宗したキースは、傘下の海外福音伝道会（Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts）の代表を任じ

られていた。この時キースが使った勧誘のパンフレットは、全てブラッドフォードの手によるものであった。⁷⁰

ペンシルベニア・クエーカーとは、数々の軋轢を繰り返したブラッドフォードであったが、故郷イングランドのクエーカーとは、依然、繋がりを持っていた。岳父ソウルの跡を継いだ義妹、テイス・ソウル・レイルトン（Tace Sowle Raylton）との親戚関係も続き、彼が自店舗で販売した書籍の多くは、このテイスから送られてきたものであった。⁷¹ 断りの手紙を送ってはいるが、テイスは自分の引退後の仕事をブラッドフォードに任せたいと申し出ていた。⁷²

1696年、ニューヨーク植民地評議会の許可を得たブラッドフォードは、西インド諸島英領バルバドス（Barbados）の公印刷人、そしてさらには1703年、近隣の植民地、ニュー・ジャージーの公印刷人を兼務した。⁷³

中でもニュー・ジャージーは、ブラッドフォードに事業家としての大きなチャンスを与えた。1710年、ニュー・ジャージー植民地代議会の書記官となった彼は、1716年から五年間続いた期限付き酒税徴収官に任ぜられ、印刷事業以外の場でも、地元有力者との関係を着々と築いていった。⁷⁴ 植民地内で複数の土地を買収する権利を得た彼は、パース・アンボイ（Perth Amboy）に新たに印刷工房を設けて、事業のさらなる拡大にも備えた。⁷⁵

ニューヨークにおいても彼は、自己の資産を着々と増やしていった。四十代、五十代の熟年期を迎えたブラッドフォードは、権力の狭間を巧みに泳ぐ処世術をも身につけ、様々に不動産買収を重ねていった。⁷⁶

1713年、ブラッドフォード50歳の年、それまで父の下で修業をし、ニューヨークで自由民（freeman）の資格を得ていた長男アンドリュー（Andrew Bradford）が独立した。1693年に父親が去って以来、満足できる印刷人を欠いていたペンシルベニアは、このアンドリューに印刷人の仕事を委ねた。父親が残した数々の軋轢と因縁にも関わらず、こうしてその子息に仕事を任せざるを得なかったところに、当時の植民地で印刷人が如何に貴重な存在であったかを窺い知ることが出来る。⁷⁷

長男アンドリューをペンシルベニアの印刷人に据えたブラッドフォードは、ニューヨーク、ニュー・ジャージーと共に発展著しい中部植民地群で事業をまかなう、一大印刷企業を完成させた。アレクサンダー・ウォールは、その後のブラッドフォードについて、今日の基準に照らし合わせれば、時に商倫理にもとる行為をも行って、財の拡大に努めたと書き記している。⁷⁸

政教相まみえる規制に苦しんだ、草創期ペンシルベニアでは叶わなかった、実業としての印刷を、ブラッドフォードは、ニューヨークで、そしてニュー・ジャージーで現実のものとした。一代で財をなした多くの資産家がそうであったように、ニューヨーク以降の彼の後半生は、貪欲な利潤追求と人脈を駆使した処世術、感情を交えない徹底した計算高さが異彩を放っている。

1725年11月、彼は満63歳でニューヨーク初の新聞、ニューヨーク・ガゼット（*The New York Gazette*）を創刊した。⁷⁹ 詳しくは別稿で書き記すこととするが、弟子のピーター・ゼンジャーが、*New York Weekly Journal* を創刊した時、師であったブラッドフォードは、これを自分の新聞のラ

イバルと見なした。そしてさらに、その弟子が法廷に立った時には、自身は中立の立場に終始し、⁸⁰ 経営する新聞 *New York Gazette* では、政府に同情的な内容の記事を載せ、ゼンジャーの論調を批判した。⁸¹

遡ること43年前、ペンシルベニアの法廷で、堂々と出版の自由を主張したブラッドフォードが、あたかも別人であるかのような顛末と言える。この事実を、ブラッドフォードの保身と見なし、彼の強欲で狡猾な側面と結びつけることはいとも容易い。しかし、この間彼が経験してきた数々の権力との軋轢を思えば、^{よわい} 齢72歳となったブラッドフォードのこの振る舞いは、どこか共鳴すべき点も見いだすことができる。若きペンシルベニア時代、彼は権力の恐ろしさを、身をもって知った人であった。未だ三十代後半の弟子ゼンジャーとブラッドフォードとでは、残された時間が違っていた。

1744年、ブラッドフォードは81歳で現役を引退した。⁸² 彼が築いたブラッドフォード家の遺産は、長男アンドリュウ、そして孫でありアメリカ革命のヒーロー、ウィリアム・ブラッドフォード (William Bradford: 祖父と同名) が引き継いだ。1752年5月23日、ウィリアム・ブラッドフォードは満89歳でその生涯を閉じた。⁸³

フレドリック・ハドソンは、植民地アメリカでブラッドフォードが切り拓いた事業としての印刷と、数々の規制に抗って、己の生活権と商業権を主張し続けた人生を次のように記している。

William Bradford emigrated from England to Pennsylvania before Philadelphia was laid out. For half a century he was printer to the colonial government. Notwithstanding his controversy with the Weekly Journal, Bradford was a champion of the freedom of the press. Members of his family, for four generations, distinguished themselves in various ways. (Hudson, 1873, Reprinted in 2015, p. 74.)

ハドソンが指摘するように、ブラッドフォードは、17世紀末期の厳格な規制に苦しみながら、事業としての印刷を断固として主張し、それを実行に移した人であった。その目的が、やがて憲法修正一箇条 (The First Amendment) として、民主国家の礎を築く公器へと発展することであったか否かは別として、抱いていた切実なまでの富と地位への憧れが、やがて出版の自由、言論の自由へと導く一助となったことは確かであった。

彼の訴えは、思えば誠に人間らしい欲望から湧き出たものであった。玉台に載せられた、至高の概念が生まれる背後には、往々にして、素朴で明快な人間の欲望が隠れ潜んでいるものである。そしてそうであるからこそ、それは人々の共感を呼び、時間の経過と共に様々な加飾を施されて、やがて眩いばかりの光彩を放つに至るのであろう。

1. Andrew R. Murphy and John Smolenski, *The Worlds of William Penn*, edited by Andrew R. Murphy and John Smolenski, Rutgers University Press, New Brunswick, New Jersey, 2018, p. 2.
2. Ibid.
3. Scott Sowerby, “William Penn and James II”, *The Worlds of William Penn*, edited by Andrew R. Murphy and John Smolenski, Rutgers University Press, New Brunswick, New Jersey, 2018, p. 184.
4. Elizabeth Sauer, “New Worlds and Holly Experiments in the Restoration Literature of Milton, Bunyan, and Penn”, *The Worlds of William Penn*, edited by Andrew R. Murphy and John Smolenski, Rutgers University Press, New Brunswick, New Jersey, 2018, pp. 157-158.
5. William Penn, edited by Jason R. Henderson, *No Cross, No Crown*, Market Street Fellowship, Ohio, 2017, p. 9.
6. Andrew R. Murphy, “The Roads to and from Cork: The Irish Origins of William Penn’s Theory of Religious Toleration”, *The Worlds of William Penn*, edited by Andrew R. Murphy and John Smolenski, Rutgers University Press, New Brunswick, New Jersey, 2018, p. 150.
7. William Penn, *The People’s Ancient and Just Liberties Asserted, in the Tryal of William Penn, & William Mead, at the Sessions Held at the Old Bailey in London, the first, third, fourth and fifth Sept.* 70, Primary Source Media, Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection, <https://link.gale.com/apps/doc/Z2001399754/BBCN?u=hosei&sid=BBCN&xid=ded8e8d1>参照，最終検索日2020/11/23.
8. Thomas F. Gordon, Reproduction of *The History of Pennsylvania, From Its Discovery By Europeans To the Declaration of Independence In 1776*, Carey, Lea & Carey, Jesper Harding, Printer, Philadelphia, 1829, by Wentworth Press, p. 54.
9. Catharine Dann Roeber, “Where William Penn Slept (And Why It Matters)”, *The Worlds of William Penn*, edited by Andrew R. Murphy and John Smolenski, Rutgers University Press, New Brunswick, New Jersey, 2018, p. 52 ならびに Patrick E. Erben, “William Penn, German Pietist(?)”, *The Worlds of William Penn*, edited by Andrew R. Murphy and John Smolenski, Rutgers University Press, New Brunswick, New Jersey, 2018, pp. 192-193.
10. 荒木暢也, 「植民地アメリカのジャーナリズム *New England Courant* 1」, 『社会志林 第67巻第1号』, pp. 8-9を参照されたい.
11. Thomas F. Gordon, Reproduction of *The History of Pennsylvania, From Its Discovery By Europeans To the Declaration of Independence In 1776*, Carey, Lea & Carey, Jesper Harding, Printer, Philadelphia, 1829, by Wentworth Press, p. 53.
12. Catharine Dann Roeber, “Where William Penn Slept (and Why It Matters)”, *The Worlds of William Penn*, edited by Andrew R. Murphy and John Smolenski, Rutgers University Press, New Brunswick, New Jersey, 2018, p. 52 ならびに Marcus Gallo, “William Penn, William Petty, and Surveying: The Irish Connection”, *The Worlds of William Penn*, edited by Andrew R. Murphy and John Smolenski, Rutgers

- University Press, New Brunswick, New Jersey, 2018, pp. 109-110.
13. Thomas F. Gordon, Reproduction of *The History of Pennsylvania, From Its Discovery By Europeans To the Declaration of Independence In 1776*, Carey, Lea & Carey, Jesper Harding, Printer, Philadelphia, 1829, by Wentworth Press, p. 55. なお、この Pennsylvania の命名については、大口地権者の間で反対も多く、国王の決定がなかった場合は、“New Whales” と命名された可能性もあったことをゴードンは書き記している。同 p. 55.
 14. “Penn’s Charter of Libertie - April 25, 1682”, Yale Law School, Lillian Goldman Law Library, https://avalon.law.yale.edu/17th_century/pa03.asp, 最終検索日：2021/02/04.
 15. “Frame of Government of Pennsylvania, May 5, 1682”, Yale Law School, Lillian Goldman Law Library, https://avalon.law.yale.edu/17th_century/pa04.asp, 最終検索日：2021/02/04.
 16. Thomas F. Gordon, Reproduction of *The History of Pennsylvania, From Its Discovery By Europeans To the Declaration of Independence In 1776*, Carey, Lea & Carey, Jesper Harding, Printer, Philadelphia, 1829, by Wentworth Press, p. 61.
 17. Thomas F. Gordon, Reproduction of *The History of Pennsylvania, From Its Discovery By Europeans To the Declaration of Independence In 1776*, Carey, Lea & Carey, Jesper Harding, Printer, Philadelphia, 1829, by Wentworth Press, pp. 61-62.
 18. “Frame of Government of Pennsylvania - February 2, 1683”, Yale Law School, Lillian Goldman Law Library, https://avalon.law.yale.edu/17th_century/pa05.asp 最終検索日：2021/02/04 ならびに Thomas F. Gordon, Reproduction of *The History of Pennsylvania, From Its Discovery By Europeans To the Declaration of Independence In 1776*, Carey, Lea & Carey, Jesper Harding, Printer, Philadelphia, 1829, by Wentworth Press, pp. 79-81.
 19. Thomas F. Gordon, Reproduction of *The History of Pennsylvania, From Its Discovery By Europeans To the Declaration of Independence In 1776*, Carey, Lea & Carey, Jesper Harding, Printer, Philadelphia, 1829, by Wentworth Press, p. 81.
 20. Thomas F. Gordon, Reproduction of *The History of Pennsylvania, From Its Discovery By Europeans To the Declaration of Independence In 1776*, Carey, Lea & Carey, Jesper Harding, Printer, Philadelphia, 1829, by Wentworth Press, pp. 61-65.
 21. Thomas F. Gordon, Reproduction of *The History of Pennsylvania, From Its Discovery By Europeans To the Declaration of Independence In 1776*, Carey, Lea & Carey, Jesper Harding, Printer, Philadelphia, 1829, by Wentworth Press, p. 60.
 22. “Colonial and pre-federal statistics”, United States Census Bureau, <https://www2.census.gov/prod2/statcomp/documents/CT1970p2-13.pdf>.
 23. Stephen B. Weeks, “History of Public School Education in Delaware”, *Department Of The Interior, Bureau Of Education, Bulletin*. 1917, No. 18, Washington, Government Printing Office, 1917, p. 15. <https://files.eric.ed.gov/fulltext/ED540854.pdf>.
 24. Thomas F. Gordon, Reproduction of *The History of Pennsylvania, From Its Discovery By Europeans To the*

- Declaration of Independence In 1776*, Carey, Lea & Carey, Jesper Harding, Printer, Philadelphia, 1829, by Wentworth Press, p. 62 ならびに p. 589.
25. Thomas F. Gordon, Reproduction of *The History of Pennsylvania, From Its Discovery By Europeans To the Declaration of Independence In 1776*, Carey, Lea & Carey, Jesper Harding, Printer, Philadelphia, 1829, by Wentworth Press, p. 97 ならびに History, William Penn Charter School, <https://www.penncharter.com/about-us/history>, 最終検索日：2020/12/03.
26. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 362, Samuel S. Purple, M. D., *Bradford Family, Genealogical Memorials of William Bradford, The Printer*, Privately Printed, New York, 1873, p. 4 ならびに “Bradford, William”, Calhoun Winton, *Oxford Dictionary of National Biography*, <https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-3181>, 最終検索日：2020/11/30. ブラッドフォードの生年については諸説あるが、アレクサンダー・ウォールは、ブラッドフォードの教会洗礼記録を元に、1663年5月30日であると確定している。以下、“William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, p. 362より引用：The Barwell Parish Church baptismal records show that he was baptized on May 30, 1663.
27. 彼がソウルの下で修業を始めた理由として、両親が共にクエーカーであった可能性が指摘されている。Calhoun Winton, “Bradford, William”, *Oxford Dictionary of National Biography*, <https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-3181>, 最終検索日：2020/11/30.
28. Anna Janney DeArmond, *Andrew Bradford, Colonial Journalist*, Greenwood Press, New York, 1969, p.3, Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 362 ならびに Calhoun Winton, “Bradford, William”, *Oxford Dictionary of National Biography*, <https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-3181>, 最終検索日：2020/11/30.
29. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 362 ならびに Samuel S. Purple, M. D., *Bradford Family, Genealogical Memorials of William Bradford, The Printer*, Privately Printed, New York, 1873, p. 4. 以下, Samuel S. Purple 著, *Bradford Family, Genealogical Memorials of William Bradford, The Printer*, p. 4 当該記述：
- In August, 1685, he was in London, and received a letter of that date from George Fox, recommending him to prominent Quakers in America, “as a sober young man who comes to Pennsylvania, to set up the trade of printing Friends books, “ &C.
30. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 362

- proceedings/44604985.pdf, p. 362.
31. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 363.
 32. Lawrence C. Wroth, *The Colonial Printer*, second edition, The Southworth-Anthoensen Press 1938, Reprinted by arrangement with The Anthoensen Press, Dominion Books, The University Press of Virginia, 1964, p. 30.
 33. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 363.
 34. 荒木暢也, 「植民地アメリカのジャーナリズム PUBLICK OCCURRENCES Both FORREIGN and DOMESTIC」, 『社会志林 第66巻第3号』, pp. 162-163 ならびに「植民地アメリカのジャーナリズム Boston News Letter & Boston Gazette」, 『社会志林 第66巻第4号』, pp. 137-139, また New England Courant を巡る出版規制に関しては, 「植民地アメリカのジャーナリズム New England Courant 3」, 『社会志林 第67巻第3号』において, 発行人ジェームス・フランクリンの逮捕にいたる記述を参照されたい。
 35. Daniel J. Boorstin, *The Americans: The Colonial Experience*, Vintage Books, New York, 1958, pp. 43-44.
 36. Daniel J. Boorstin, *The Americans: The Colonial Experience*, Vintage Books, New York, 1958, p. 44.
 37. Ibid.
 38. Ibid.
 39. Ibid.
 40. Ibid.
 41. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 363.
 42. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 363 ならびに Darcie Nadel, “Daniel Leeds: The Real Jersey Devil”, Owlcation, <https://owlcation.com/social-sciences/Daniel-Leeds-The-Real-Jersey-Devil>, 最終検索日 : 2020/12/15.
 43. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 363.
 44. Ibid.
 45. Richard Kluger, *Indelible Ink, The Trials of John Peter Zenger and the Birth of America's Free Press*, W. Norton & Company, New York, 2016, p. 29.

46. Richard Kluger, *Indelible Ink, The Trials of John Peter Zenger and the Birth of America's Free Press*, W. Norton & Company, New York, 2016, p. 31.
47. Alexander J. Wall, Jr., "William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review", *Proceedings of the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 363, "Act of Parliament of 1662" については、同 p. 366.
48. Alexander J. Wall, Jr., "William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review", *Proceedings of the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 364.
49. 植民地移住者が持っていたマグナカルタの伝統から来る意識に関しては、荒木暢也、「植民地アメリカのジャーナリズム PUBLIC OCCURRENCES Both FOREIGN and DOMESTIC」,『社会志林 第66巻第3号』, p. 153 において言及している。
50. Alexander J. Wall, Jr., "William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review", *Proceedings of the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 364.
51. Alexander J. Wall, Jr., "William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review", *Proceedings of the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, pp. 364-365.
52. Alexander J. Wall, Jr., "William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review", *Proceedings of the American Antiquarian Society*, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, pp. 365-366.
53. Alexander J. Wall, Jr., "William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review", *Proceedings of the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 366.
54. Ibid.
55. Ibid.
56. Alexander J. Wall, Jr., "William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review", *Proceedings of the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, pp. 367-368.
57. ブラッドフォード釈放の時期については、本人が書き残した資料と別の証言資料との間に食い違いが見られ、これを断定することは出来ない。Alexander J. Wall, Jr., "William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review", *Proceedings of the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, pp. 367-368.
58. Alexander J. Wall, Jr., "William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review", *Proceedings of the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 367.
59. Alexander J. Wall, Jr., "William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review", *Proceedings of*

- the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 368.
60. Frederic Hudson, *Reproduction of Journalism in the United States, from 1690-1872*, Harper & Brothers, New York, 1873, Reprinted by Arkose Press, 2015, pp. 49-50.
 61. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 368.
 62. Simon Middleton, *From privileges to rights: work and politics in colonial New York City*, University of Pennsylvania Press, Philadelphia, 2006, pp. 51-52.
 63. Simon Middleton, *From privileges to rights: work and politics in colonial New York City*, University of Pennsylvania Press, Philadelphia, 2006, p. 53.
 64. “Stone Street Historic District”, New York City Landmarks Preservation Commission. June 25, 1996, <http://s-media.nyc.gov/agencies/lpc/lp/1938.pdf>, p. 33.
 65. “Stone Street Historic District”, New York City Landmarks Preservation Commission. June 25, 1996, <http://s-media.nyc.gov/agencies/lpc/lp/1938.pdf>, p. 5.
 66. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society*, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, pp. 368-369.
 67. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society*, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 369.
 68. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society*, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, pp. 370-371.
 69. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society*, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 371.
 70. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society*, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 371
ならびに Calhoun Winton, *Oxford Dictionary of National Biography*, <https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-3181>, 最終検索日：2020/11/30.
 71. Calhoun Winton, *Oxford Dictionary of National Biography*, <https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-3181>, 最終検索日：2020/11/30.
 72. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society*, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 372.
 73. Ibid.
 74. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society*, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, pp. 372-

- 373.
75. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society*, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, pp. 373-374.
 76. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society*, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, pp. 374-375.
 77. Anna Janney DeArmond, *Andrew Bradford, Colonial Journalist*, Greenwood Press, New York, 1969, pp. 7-8, Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society*, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, pp. 375-376 ならびに Calhoun Winton, “Bradford, William”, *Oxford Dictionary of National Biography*, <https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-3181>, 最終検索日：2020/11/30.
 78. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society*, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, pp. 376-377.
 79. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society*, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 378.
 80. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society*, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, pp. 380-381
 81. Richard Kluger, *Indelible Ink, The Trials of John Peter Zenger and the Birth of America's Free Press*, W. W. Norton & Company, New York, 2016, pp. 176-177.
 82. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society*, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 381.
 83. Alexander J. Wall, Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society*, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>, p. 383 ならびに Calhoun Winton, *Oxford Dictionary of National Biography*, <https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-3181>, 最終検索日：2020/11/30.

参考文献

- Boorstin, Daniel J., *The Americans: The Colonial Experience*, Vintage Books, New York, 1958.
- DeArmond, Anna Janney, *Andrew Bradford, Colonial Journalist*, Greenwood Press, New York, 1969.
- Gordon, Thomas F., *Reproduction of The History of Pennsylvania, From Its Discovery By Europeans To the Declaration of Independence In 1776*, Carey, Lea & Carey, Jesper Harding, Printer, Philadelphia, 1829, by

Wentworth Press.

- Hudson, Frederic, *Reproduction of Journalism in the United States, from 1690-1872*, Harper & Brothers, New York, 1873, Reprinted by Arkose Press, 2015.
- Kluger, Richard, *Indelible Ink, The Trials of John Peter Zenger and the Birth of America's Free Press*, W. W. Norton & Company, New York, 2016.
- Middleton, Simon, *From privileges to rights: work and politics in colonial New York City*, University of Pennsylvania Press, Philadelphia, 2006.
- Murphy, Andrew R. and Smolenski John, et al. *The Worlds of William Penn*, edited by Andrew R. Murphy and John Smolenski, Rutgers University Press, New Brunswick, New Jersey, 2018.
- Nadel, Darcie, “Daniel Leeds: The Real Jersey Devil”, Owlcation, <https://owlcation.com>, 最終検索日 : 2020/12/15.
- Nash, Gary B., “The Framing of Government in Pennsylvania: Ideas in Contact with Reality”, *The William and Mary Quarterly*, Apr., 1966, Vol. 23, No. 2 (Apr., 1966), pp. 183-209, Omohundro Institute of Early American History and Culture, <https://www.jstor.org/stable/1922507>, 最終検索日 : 2021/03/13.
- New York City Landmarks Preservation Commission. June 25, 1996, <http://s-media.nyc.gov/agencies/lpc/lp/1938.pdf>.
- Penn, William, *The People's Ancient and Just Liberties Asserted, in the Tryal of William Penn, & William Mead, at the Sessions Held at the Old Bailey in London, the first, third, fourth and fifth Sept. 70*, Primary Source Media, Seventeenth and Eighteenth Century Burney Newspapers Collection, <https://link.gale.com/apps/doc/Z2001399754/BBCN?u=hosei&sid=BBCN&xid=ded8e8d1>, 最終検索日2020/11/23.
- Penn, William, edited by Jason R. Henderson, *No Cross, No Crown*, Market Street Fellowship, Ohio, 2017.
- Purple, Samuel S., M. D., *Bradford Family, Genealogical Memorials of William Bradford, The Printer*, Privately Printed, New York, 1873.
- United States Census Bureau, <https://www2.census.gov/prod2/statcomp/documents/CT1970p2-13.pdf>.
- Wall, Alexander J., Jr., “William Bradford, Colonial Printer A Tercentenary Review”, *Proceedings of the American Antiquarian Society* 73, October, 1963, <https://www.americanantiquarian.org/proceedings/44604985.pdf>.
- Weeks, Stephen B., “History of Public School Education in Delaware”, *Department Of The Interior, Bureau Of Education, Bulletin*. 1917, No. 18, Washington, Government Printing Office, 1917, p. 15. <https://files.eric.ed.gov/fulltext/ED540854.pdf>.
- Winton, Calhoun, “Bradford, William”, *Oxford Dictionary of National Biography*, <https://www.oxforddnb.com/>, 最終検索日 : 2020/11/30.
- Wroth, Lawrence C., *The Colonial Printer*, second edition, The Southworth-Anthoensen Press 1938, Reprinted by arrangement with The Anthoensen Press, Dominion Books, The University Press of Virginia, 1964.
- Yale Law School, Lillian Goldman Law Library, https://avalon.law.yale.edu/17th_century/pa03.asp, 最終

検索日：2021/02/04.

・荒木暢也,「植民地アメリカのジャーナリズム *PUBLICK OCCURRENCES Both FORREIGN and DOMESTIC*」,『社会志林 第66巻第3号』,「植民地アメリカのジャーナリズム *Boston News Letter & Boston Gazette*」,『社会志林 第66巻第4号』,「植民地アメリカのジャーナリズム *New England Courant* 1」,『社会志林 第67巻第1号』,「植民地アメリカのジャーナリズム *New England Courant* 3」,『社会志林 第67巻第3号』.

Appendix : William Penn, Preface, “Frame of Government of Pennsylvania, May 5, 1682”, The Avalon Project, Documents in Law, History and Diplomacy, Yale Law School Lillian Goldman Law Library, https://avalon.law.yale.edu/17th_century/pa04.asp, 最終検索日 : 2021/02/04

The Preface

When the great and wise God had made the world, of all his creatures, it pleased him to chuse man his Deputy to rule it: and to fit him for so great a charge and trust, he did not only qualify him with skill and power, but with integrity to use them justly. This native goodness was equally his honour and his happiness, and whilst he stood here, all went well; there was no need of coercive or compulsive means; the precept of divine love and truth, in his bosom, was the guide and keeper of his innocency. But lust prevailing against duty, made a lamentable breach upon it; and the law, that before had no power over him, took place upon him, and his disobedient posterity, that such as would not live comformable to the holy law within, should fall under the reproof and correction of the just law without, in a Judicial administration.

This the Apostle teaches in divers of his epistles: “The law (says he) was added because of transgression:” In another place, “Knowing that the law was not made for the righteous man; but for the disobedient and ungodly, for sinners, for unholy and prophane, for murderers, for whoremongers, for them that defile themselves with mankind, and for man-stealers, for lyers, for perjured persons,” &c., but this is not all, he opens and carries the matter of government a little further: “Let every soul be subject to the higher powers; for there is no power but of God. The powers that be are ordained of God: whosoever therefore resisteth the power, resisteth the ordinance of God. For rulers are not a terror to good works, but to evil: wilt thou then not be afraid of the power? do that which is good, and thou shalt have praise of the same.” “He is the minister of God to thee for good.” “Wherefore ye must needs be subject, not only for wrath, but for conscience sake.”

This settles the divine right of government beyond exception, and that for two ends: first, to terrify evil doers: secondly, to cherish those that do well; which gives government a life beyond corruption, and makes it as durable in the world, as good men shall be. So that government seems to me a part of religion itself, a filing sacred in its institution and end. For, if it does not directly remove the cause, it crushes the effects of evil, and is as such, (though a lower, yet) an emanation of the same Divine Power, that is both author and object of pure religion; the difference lying here, that the one is more free and mental, the other more corporal and compulsive in its operations: but that is only to evil doers; government itself being otherwise as capable of kindness, goodness and charity, as a more private society. They weakly err, that think there is no other use of government, than correction, which is the coarsest part of it: daily experience tells us, that the care and regulation of many other affairs, more soft, and daily necessary, make up much of the greatest part

of government; and which must have followed the peopling of the world, had Adam never fell, and will continue among men, on earth, under the highest attainments they may arrive at, by the coming of the blessed Second Adam, the Lord from heaven. Thus much of government in general, as to its rise and end.

For particular frames and models, it will become me to say little; and comparatively I will say nothing. My reasons are:

First. That the age is too nice and difficult for it; there being nothing the wits of men are more busy and divided upon. It is true, they seem to agree to the end, to wit, happiness; but, in the means, they differ, as to divine, so to this human felicity; and the cause is much the same, not always want of light and knowledge, but want of using them rightly. Men side with their passions against their reason, and their sinister interests have so strong a bias upon their minds, that they lean to them against the good of the things they know.

Secondly. I do not find a model in the world, that time, place, and some singular emergences have not necessarily altered; nor is it easy to frame a civil government, that shall serve all places alike.

Thirdly. I know what is said by the several admirers of monarchy, aristocracy and democracy, which are the rule of one, a few, and many, and are the three common ideas of government, when men discourse on the subject. But I chuse to solve the controversy with this small distinction, and it belongs to all three: Any government is free to the people under it (whatever be the frame) where the laws rule, and the people are a party to those laws, and more than this is tyranny, oligarchy, or confusion.

But, lastly, when all is said, there is hardly one frame of government in the world so ill designed by its first founders, that, in good hands, would not do well enough; and story tells us, the best, in ill ones, can do nothing that is great or good; witness the Jewish and Roman states. Governments, like clocks, go from the motion men give them; and as governments are made and moved by men, so by them they are ruined too. Wherefore governments rather depend upon men, than men upon governments. Let men be good, and the government cannot be bad; if it be ill, they will cure it. But, if men be bad, let the government be never so good, they will endeavor to warp and spoil it to their turn.

I know some say, let us have good laws, and no matter for the men that execute them: but let them consider, that though good laws do well, good men do better: for good laws may want good men, and be abolished or evaded by ill men but good men will never want good laws, nor suffer ill ones. It is true, good laws have some awe upon ill ministers, but that is where they have not power to escape or abolish them, and the people are generally wise and good: but a loose and depraved people (which is the question) love laws and an administration like themselves. That, therefore, which makes a good constitution, must keep it, viz: men

of wisdom and virtue, qualities, that because they descend not with worldly inheritances, must be carefully propagated by a virtuous education of youth; for which after ages will owe more to the care and prudence of founders, and the successive magistracy, than to their parents, for their private patrimonies

These considerations of the weight of government, and the nice and various opinions about it, made it uneasy to me to think of publishing the ensuing frame and conditional laws, foreseeing both the censures, they will meet with, from melt of differing humours and engagements, and the occasion they may give of discourse beyond my design.

But, next to the power of necessity, (which is a solicitor, that will take no denial) this induced me to a compliance, that we have (with reverence to God, and good conscience to men) to the best of our skill, contrived and composed the frame and laws of this government, to the great end of all government, viz: To support power in reverence with the people, and to secure the people from the almost of power; that they may be free by their just obedience, and the magistrates honourable, for their just administration: for liberty without obedience is confusion, and obedience without liberty is slavery. To carry this evenness is partly owing to the constitution, and partly to the magistracy: where either of these fail, government will be subject to convulsions; but where both are wanting, it must be totally subverted; then where both meet, the government is like to endure. Which I humbly pray and hope God will please to make the lot of this of Pensilvania. Amen.

WILLIAM PENN.